
PRIEST

落鮎 雁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P R I E S T

【Nコード】

N 7 4 6 7 D

【作者名】

落鮎 雁

【あらすじ】

“私は、罪を犯します”：俺が身を置く町では、人は新たに罪を犯す為に教会を訪れる…《case A》：二人の背中、正真正銘の夫婦のように穏やかだった（完結）《小休止》：私は今、とても損な気分である（NEW）

Prologue…悪い朝

久しぶりに、良い夜を過ごした。

良い酒も飲んだし、良い話もした。

本当に良い気分だった。良い明日、良い朝を夢見る程に。

良い朝

それは、神父がやって来ない朝だ。

(…枕を、取れ…)

けたたましい音響が部屋中を揺さ振る。おんぼろベルは今にもその音を擦り切れさせて朽ちそうなのに、意外な耐久力と無駄な大音量を誇っていた。

ドアのベルで叩き起こされる生活を長年してきて判ったが、人間 -
- 俺だけかもしれないが -、うるさくされると余計に起きたくなくなるものだ。

(…枕で、耳を塞げ…)

頭の中で何度も指令が繰り返される。寝起きは頭が働かないと言うが、それは違う。人間 - - 俺だけなのか? - -、寝起きたって起きているには違いないのだから、頭は働く。ただ、身体が働かないだけのこと。

(…………枕を、取る…………)

今朝も例に違わない。

望む行為を実行するどころか、指一本動かせないまま大音響に耐える。いやに規則的な断続を繰り返すそれは目指し時計に似ているが、目覚まし時計の方がまだ劣りのある音を立てるというものだ。

(……………………)

睨すら上げるのを拒否していた俺の身体は、さして長くもない防衛の後、これまた例に違わず観念した。

枕を取ることはいらない。皺だらけのシーツに未練たっぷりなまま、ベルに急かされてなんとか起き上がる。擦れてぼやけた藍色のジーンズを履き、くたびれてよれよれのシャツを羽織る。

ドアノブを捻ると、漸く音響はおさまった。そのまま開く。

出来れば見たくない顔が、こっちこそ好きで会いに来てるわけじゃないと全面的に訴えてきた。

「お早ようございます。まあ、昼近いですけど」

いつものことですが、そう付け加えるなら何故、毎度毎度言及するのか。

「……………今日もか」

声がしわがれる。昨夜の酒は良い酒だったが、少々飲み過ぎた。そんな頭を大音響に揺さ振られて、気分はまったくもって良くない。

「仕方ありません」

実に真摯に言い切った。というのは他でもない、自分がわざわざこのおんぼろアパートにやって来なければならぬことについてだ。

くたびれてよれよれの殺人鬼に会いに。

「…それ以上の格好が出来ないなら、せめてボタンを留めて、帽子でも被って下さい」

俺の出で立ちを冷めた目でざつと確認して言い渡すと、下で待っていますと言い残して向こうからドアを閉めた。

硬い靴の底が床を踏みならし、階段を降りていく。高らかに響く音をドア越しに聞いていた。

「……………」

俺もこのまま出ようとは思っていない、これは部屋着だ。言い返し損ねた言葉を飲み込んだままドアに背を向け、ベッドを通り過ぎ、洗面台に向かう。

汚れた鏡に映る姿は確かに褒められたものではない。常日頃からさして小綺麗にしているわけでもないが、アクロバティックですらあ

る寝癖はガキでも自分から直してもらいたがるだろう。一晩で伸びた無精髭のせいで五歳は老けて見えるに違いない。

まずは顔を洗って、寝癖直しに髪も濡らそう。シャワーなど浴びてあまり神父を待たせると、また冷やややかな嫌味を投げ付けられるのは必至なので、どちらも狭い洗面台で済ませることにした。

蛇口を捻る。

神父の視線よりも幾分温い水が吐き出された。

『私は罪を犯します』

俺が身を置く町では、人は罪ではなく恨みを告白し、新たに罪を犯す為に教会を訪れる。

この町に於いて、神父が味方をするのは、真つ黒な恨みを抱えながら自分ではどうすることも出来ないような、哀れで痩せ細った小羊達ばかりだった。

今朝早くにやって来たというその男も、迷える小羊にだけはやさしい神父の許で、ひっそりと恨みを告白したのだった。

男はやはり、深く憔悴していたという。

「浮気だそうですよ、奥様の」

アパートに程近い、昼は喫茶店、夜はバーになる店の隅に席を取り、神父から説法の代わりに殺しの依頼を説「と」かれる。

とりあえず俺は、寝癖を撫で付けて髭を剃り、比較的皺が目立たな

いシャツとベストを身につけて、まあまあ見られる出で立ちで席に着いている。

「よくある話だな」

アイスコーヒーをストローで吸い上げる。冷たい苦みが、やや二日酔いの喉と頭を冷やして心地が良い。

「大概、よくある話ではありませんか」

コーヒーよりも深い漆黒の法衣に身を包みながら、神父が持ち上げる暖かいカップの中身は琥珀色だ。

俺がとりあえずはマシな格好をしているせいか、あれ以上冷たい視線を向けてくることは無い。というか、視線自体それほど向けてこないが。

「まあ、男と女のいざこざ自体がよくある話だな」

「気のせいか、その手のいざこざで駆け込んでくるのは、近頃女性より男性が多くなりました」

「……女は強くなったからな、このご時世」

昨夜それを実感したところである俺は、情けないと思う反面、少しばかり誇らしかった。

あれは本当に、良い夜だった。

「何をにやけているのでしょうかね」

我に返れば、たちまち冷水のような眼差しとかち合う。嫌味を言う時にしか俺を見てこないのだろうか、こいつは。

「脱線しました。話を続けても？」

「……ドウゾ」

「奥様はこの方です」

神父はカップを置いて視線を下げると、膝に乗せた聖書を開いてページの間から写真を取り出し、テーブルに置いた。

長い髪がふわふわと柔らかかそうな、二十代後半と思しき女性が、そこに居た。

「一年程前の写真だそうです。今は髪を切っていると聞きました」

写真を取り上げ、改めてよく眺める。

見れば見るほど綺麗な女性だ。顔つきはとびきり整っているとは言えないが、彼女が纏う雰囲気か - - 写真に閉じ込められたものであつてさえも - - 彼女をとても美しい生きものにしていて。吹けば飛んでいってしまう蒲公英「たんぽぽ」の綿毛のように、儂い。

彼女の肩を抱き寄せる腕があつたが、腕の持ち主は肩の辺りから写真の外へ追い出されていた。よく見るとその肩の辺りで写真は切り取られている。あまりに丁寧に真つすぐ切られていたので、気が付かなかつた。

「そしてこちらが、浮気相手の方」

顔を上げると、既に二枚目の写真が差し出されている。

「もう調べたのか」

「依頼を受けたのは今朝ですよ？どちらも依頼者からいただきました」

「探偵でも雇ったのか、その旦那」

「仕事仲間だそうです」

淡々と告げられたが、その言葉の裏に悲哀が隠されている気がした。神父ではなく、妻を友に奪われゆく夫の。

それは事情に含まれた悲哀、つまるところはその事情に感じた俺の悲哀だ。

二枚目の写真も手に取る。これもまた、一人の男を囲んで周りがかきつちりと切り取られ、写真としては小さなものになっていた。数人の身体が途切れて残されているところから見て、仲間内で撮った記念写真か何かのようだ。

先程の女性と同じくらいか、少し年上だろう。最高級とは言えないものの、中流としてはかなり質の良いスーツに逞しい身体を包んでいる。力のある青い目が印象的だ。総合的に見て、男前と言える。

「依頼者が、夫婦間がぎこちないと感じ始めたのは半年前、二人の関係に気付いたのが二ヶ月前という事です」

「二カ月前？ちょっと間が開きすぎてやしないか」

「浮気に気付くのが？」

「違う。依頼に来るのが、だ」

人殺しの依頼をするのに尻込みするのは無理もないが、それにしても二カ月は長いように思う。

俺の疑問に対して、神父は浅く溜め息を零す。俺に呆れている、という感じでは――大変珍しいことだが――なかった。

「……二カ月前には、まだ殺意は生まれていなかったんですよ」

そして、俺を見た。

違和感、を覚える。

その言葉に対してではない。

神父が俺を見ていた。その目には軽蔑の色がない。あるのは、悲哀だ。

それは、神父自身の悲哀であるように見えた。

しかし俺の違和感は、続いた神父の一言で、別の感覚に形を変えた

――

青いラベルの貼られたプラスチックのボトルを取る。持ち運びに適したそれは手の中にすっぽりとおさまった。重さはあまり無いが、傾けるとざらざらと音がする。

「そいつで良いのかい？」

何処かつまらなさそうな声を聞いて、振り返る。

この部屋には窓がない。昼下がりでも蛍光灯が不可欠だ。青白く光る人工の明かりの下、白衣姿の男がデスクに座って――文字通りデスクに腰掛けて――いた。資料やら医学・薬学関係の本が積み重ねてひどく混み合っているが、そんな中に見事に調和している。

男には薬学書のような印象を覚える。知識を食べ尽くし、それ故に身が重く――体は細身だが――あまり動かない。それに、本は陽に晒されると傷むのだ。蛍光灯の青白い光に照らされているのが、似合う。

「そんなもん使うとは、お前さんらしくないな」

溜め息混じりに眼鏡の臺を――縁のない楕円形の眼鏡が、冷えた知性を象徴して様になっている――押し上げる手は筋張っていて、指は妙にすらりと伸びていた。薬品を扱う者の手は繊細なものだと言う、彼ご自慢の指だ。

「これを使うのが一番良い仕事なんだ、今回は」

言い訳するようにそう答えると、ふーん…と納得いかなさそうに声

を上げたきり、それ以上俺の仕事の話に踏み込んでこなかった。

「助かるよ。あんたの店が一番揃いが良いんだ」

何となく機嫌を取る為に改まって礼を述べながら、棚の戸を閉めて側を離れる。そこには俺が手にしたくらいの大きさと形のボトル達が、色とりどりのラベルを貼られてびっしりと並んでいた。この部屋の壁の四分の三はそんな棚が占拠している。並んでいるボトルのカラフルな外見だけ見れば、菓子売場のラムネコーナーといったところか。

それ自体で完成品のものもあれば、他と組み合わせで初めて効果を発揮するものもある。その本質は、それらの主だけが完全に理解していた。

「お安い御用さ。そいつらも使っていないと湿気ちまう」

デスクから降り、白衣を揺らしてゆったりと歩いてくる。やはり、動いている姿の方が不自然に見えてしまう。この男はデスクの上で蓄えた知識を覗き込まれるのをじっと待っているべきだ…そんな気がする。

すれ違いざまに、白衣の胸ポケットに紙幣を二枚差し入れた。

「何年か前は、こいつらももつと日の目を見てたんだがなあ…」

報酬にさした興味も無さそうに棚に近付き、自慢の指でガラス戸を撫でる。妻を愛撫するような、我が子を慈しむような手つきだ。

「前より客が減ったのか？」

「いいやあ…」

ガラス戸に指をあてがったまま、白い肩越しにこちらを振り返る。
レンズの奥でまだつまらなそうな目をしていた。

「お前さん、さ」

「俺？」

「“ドーベルマン”がお前さんにな変わったからだよ。前の“ドーブ
ルマン”はこいつらがお気に入りで入ってたってのに」

つまり、お前さんの所為さ…薬学書はつまらなさそうな目をしたま
ま、意地悪そうな笑みを浮かべて見せた。

(ドーベルマンか…まったく、お似合いだな)

裏手から出る。

表側の店にはれっきとしたドラッグストアの看板が掲げられている
のだ。婆さんが腰痛に効く薬でも買いに来たり、お嬢ちゃんがニキ
ビ直しのクリームでも探しに来たりしてるのだろう。

(そういえば、俺より前に雇ってた奴の話は聞かされないな)

建物の狭間に伸びる裏道から、仰げば遠く、細長く切り取られた空
が見える。真つすぐ、きつちりと…あの写真のように…困われ
た青い風景が、まっさらな陽で彩られて、ひどく眩しい。

(……俺の知ったことじゃない……か)

顔を下げ、表通りを目指して歩き始める。古本屋で頭を使わないコミックを二、三冊、食品店でソーセイジとソーダ水を買って、アパートに戻る。

今日はもうそれきり何処にも行かない。

明日は、仕事だ。

喫茶店のベルが鳴る。俺のアパートのそれとは程遠い、優しく囁くような、客を快く招き入れる音だ。

男と女が入ってきた。写真の二人だ。

神父が言った通り、女は髪を短くしていた。そのせいだろうか、儂げな雰囲気にも明るさと少しの強さが加わったようだ。服装も身軽なものになっていたが、足元は踵のない平たい靴を履いていて、何処か不釣り合いに思えた。

男の方は目立った変化は見られない……いや、精気に輝いていた青い瞳は、幾分穏やかな眼差しを女に投げ掛ける。腰に添えた手に、汗が滲んでいる。

二人は窓際の明るい席を取った。男が先に椅子を引いて女に勧め、女は男の気遣いが心底嬉しそうに笑う。昼下がりの暖かい光が二人を包み込んでいる。

男はコーヒーを、女はレモネードを頼んだ。どちらもホットだ。

しばらく二人は談笑を続けた。流行りのテレビドラマの話や、ゴシップ記事の真偽など、たわいもない話題。

男が煙草を止める決意をしたという話には、女はひどく喜んだ。

「……………ごめんなさい」

やがて女が表情を沈め、俯いて詫びる。ふわふわと柔らかな前髪が額を覆う。

「謝るのは僕の方だ」

男が女の手を握る。力強い大きな手は、精一杯の優しさを込めて、細く繊細な指を守ろうとするようだ。

「あいつには、僕が話をつけるから」

すると女は顔を上げ、目元に掛かる前髪を払い除けてから真直ぐに男を見つめる。驚くほどの力強い視線は、先程俯いたそれと同じものとは思えない。

「駄目よ。私から話すわ」

そして、長い睫毛を伏せて瞳に影を落とす。やはり、女の瞳には強さと弱さ、強固さと繊細さが共存しているようだ。

「…あの人を苦しめてしまったのは、私よ」

男がゆるゆると首を振る。青い目が愛おしさに輝いていた。

「二人で、あいつに話そう」

女は少し押し黙る。

外で、学校帰りの子供達がはしゃぐ声がする。

「……………」ありがとう……………」

はしゃぎ声に掻き消されそうな声を微かに震わせて、女は男の手を握り返した。強くあるうと懸命に、しっかりと握り返す。

二人はしばらく、お互いの強さと優しさを確かめ合うように、手を握り合っていた。

店内に息を潜めるまばらな客達は、それぞれの世界に閉じこもっているように…もしくは他人の世界など興味を持たないかのようになり、誰も二人の様子を訝ろうとはしなかった。

最初に明るい声を上げたのは男の方だった。飲み物が冷めてしまうと促せば、女も僅かな笑みを作ってみせ、なんとか頷く。微かに湿っていた声と眼差しが、レモネードを口にするごとに暖められ、明るさと微笑みを取り戻していく。その様子を見守りつつ、男もコーヒークップを傾けた。

西日の色が濃くならぬうちに、二人は喫茶店を出る。ゆっくりと歩調を合わせて歩いていく二人の背中からは、ほろ苦い決意と幸せに彩られ、既に真正銘の夫婦のように穏やかだった。

(…人間失格だな、俺は)

苦い溜め息を付きながら、二人が去った窓際の席に歩み寄る。どち

らのカップも綺麗に飲み干されているのを見て、後ろめたい思いと共に安堵した。

それらをトレイに乗せて、引き上げる。

「中々様になっっているではありませんか」

カウンター席に座っていた神父がすれ違いざまに、俺のウェイター姿を茶化してくる。先日の朝と同じく漆黒のローブに身を包み、視線は聖書に落とされていながら、口元にはうっすらと笑みを浮かべている。いけすかない、小馬鹿にした笑みだ、と思い込んでおくことにした。

「…そりゃどーも」

まったく嬉しくない気分のまま、カウンターの内側へ引っ込む。真っ先にシンクへ二つのカップを放り込み、念入りに洗う。

脳裏に、ラベルの青が焼き付いていた。

case A - 4

アパートのベッドの上に寝転び、俺は待っていた。

先日買ったコミックは早々に読み終えてしまっていた。想定していたよりはまず面白かった。アパートの別室にシングルマザーの母と子が住んでいるのだが、読み終わったコミックはその息子にくれてやることにしている。コミックに対する目が中々厳しいボウズなのだが、この本ならば少しは喜んでくれそうだ。

窓の外はとつぷりと更けている。ごくたまに、車のライトがむさ苦しい部屋を照らすだけ照らして消え去っていく以外は、ブラインドで細切れにされた月明かりが、闇をぼんやりと光らせるだけだ。電球も、小さなボロのテレビも眠っている。

眠って良い状況にも関わらず、シーツに仰向けになっている俺は、ジャケットを羽織ったままで居る。

汚れた天井を見上げて、何となく息を殺していた。

やがて、待っていたものが、人殺しが棲む闇を真っ赤に照らし出す。

それを合図に、俺は飛び起きた。

車道を両側から挟む二本の歩道には、どちらも人影が無いに等しい。その片側を走っていくと、街灯を避けるように闇の中に沈んだ、闇よりも深い黒を捉える。

「・・・おや、遅かったですね」

さほど寒くもないのに着込んだコートも、その狭間から覗くいつもの法衣も、足も悪くない癖に手にしているステッキも、全てが黒一色。そのせいか、こちらに向けられる顔だけが、浮き上がったように白く見える。

走ってきた勢いで、俺は街灯の明かりの中へ飛び込んだ。ちょうど人ひとり分のスポットライトに囲われ、何故だかひどく場違いな気分になる。

「早いじゃねえか・・・」

「薬が効く時間を考えて、少し前から待っていただけです」

にべもなく答えるや否や、白い顔は車道の向こうへ視線を戻す。軽く息を整えながら、俺もそちらを見る。

この町では一番大きな市民病院だ。人命を救うという使命を負っているだけに昼間は頼もしい姿を誇るが、夜闇にひっそりと佇立する外観は何処か不吉で、ともすれば巨大な墓石のようにも見える。

先程アパートの傍を通り過ぎた救急車は既にその役目を終えたらしく、見たところ外観はしんと静まっているようにも見えた。いくつかの窓が緑色の蛍光に染まっている。

「まだ暫らくかかるはずですよ。結果ならば私が報告しても良いで

すが……待ちますか？」

「待つさ……待つとも」

何時間でも待つつもりだ。

俺のような職種は、自分の仕事が完遂されるのを見届ける必要がある。失敗していれば、また次の手を考えるか、依頼主によっては代償を求めてくるだろう。

感傷だけではなく、自分の目で確認する責任を伴っていると思う。

「仕事熱心ですね」

「…アンタこそ、帰っても良いんじゃないか。後で報告してやってもいいぜ」

「私は神父ですから」

何を今更、と言わんばかりに答える、隣の聖職者をちらりと見る。

片手にはステッキを、片手にはロザリオの十字架を握り、背筋を真直ぐに伸ばして佇んでいる。俺の方には目もくれず、ぼつぼつと緑に光る墓石のような建物を見つめている。横顔だけでは、その瞳に浮かぶ感情は計りかねた。

彼もまた、見届ける責任がある職種なのだ。

「…仕事熱心じゃないか、アンタも」

神父は何も答えない。

俺も口をつぐんだ。

今度は二人で待ち続けた。息を潜め、片や闇に沈み、片やライトに閉じ込められたまま。

待っていた時間は、短く感じられた。

ぼんやりと明るい病院の玄関口に、人影が見えた。

男だった。俯いたまま、重々しい足取りで出てきた。すぐに立ち止まり、星のまばらな夜空へ顔を上げる。ややあつて振り向き、また玄関口へ戻る。そして、遅れて出てきた女の手を取った。

全身から力が抜け、紙人形のようにひらひらと、立っているのも危うい女の手を、男はゆっくりと引き寄せる。震えているわけでもないのに、女はひどく寒そうに見えた。男にもそう見えたのだろう、細い、頼りなげな肩を、逞しい腕に包み込む。

「終わったようですね」

闇の中で、神父がささやかに、しかし厳粛に宣言する。聞いているのは俺だけだ。

病院から目を逸らすと、ちょうど神父が十字を切っているのが目に入った。

仕事は、終わった。

「依頼者が、とても感謝していらっしやいましたよ」

静かな声が、高い天井に反響する。

広さはさほど無い礼拝堂だが、天井がべらぼうに高い。天に向かって円錐形に伸びていく壁には、お決まりのようにステンドグラスがはめ込まれている。外からの陽射しが照らせば、色とりどりの影が床を飾る。

さほど広くない床をほぼ占拠する長椅子は、今は虚しく、空白と俺一人だけを抱えている。最前列のど真ん中に陣取った俺の前には、ちょうど一番大きなステンドグラスが見えるようになっていた。聖母マリアを型取るそれはかなり高い位置にあり、真下には小さなキリストが壁に磔になっていた。神父は教壇ではなく、そのキリストの傍に居る。

「貴方が、とても良い仕事をしてくれたと。奥様は何も気付いていないそうです」

「そうかよ」

俺の気の無い返事を、神父はキリストを見上げたまま、少し笑ったようだ。

「…アンタ、来るものは本当に拒まないな」

正直、今朝の寝覚めは最悪だった。大概仕事を終えた次の日は良い気分ではないが、今回は特別悪い。

「ちよつとは俺の身にもなれよ」

「何を言いますか。貴方は仕事を終える度に感傷に浸るつもりですか？」

肩越しに少しばかりこちらを振り返る。その目には、数日前に見せた悲哀は微塵もない。ただ冷えた眼差しがあるだけだ。

「まあ、この職についてまだ半年経つか経たないか：新米としては、仕事の出来は上々です。潰れない程度ならば、多少の感傷も今は許しましょう」

神父に褒められて喜べたことは、今のところない。

「今回は…私もあまり依頼されたことのないケースだったことですし」

再び、神父の目元は見えなくなる。僅かに悲哀が戻ってきたのだろうか。

背中が、何も語り掛けてこない。

- 数日前。

「彼女の腹には、子が居ます。その子を殺してください」

喫茶店の客達が他人の事情に興味を持たないとはいえ、神父は声帯を使うことなく呼気だけで、早口に囁いた。

「……………胎児を、殺すのか？」

戸惑いが疑問に変わる。

思わず、小さいが声を立ててしまった俺を、神父が鋭い眼差しで咎めた。

聞かれるのがまずいことから、この店を打ち合せ場所には選ばなければ良いのだが……以下、神父曰く……教会を訪れる者には、まっとうに礼拝の為に来る者も居る。俺のアパートには一秒でも長く居たくないし、店のマスターや従業員の中には、神父の裏の商売を知っている奴も居た。協力を得る時は手っ取り早い。

「……浮気相手の子です。母体には極力負担を掛けないでください。万が一彼女まで道連れにした場合、失敗となります」

「……………医者の仕事だぜ、そりゃあ。俺に……アンタに依頼するようになことじゃない」

疑問符に頭を取り囲まれた心地だが、神父につられて俺も声を低める。

幸い、店に居る客は暇を持って余す耳の遠い爺さんや、雑誌に夢中な不良少女くらいだった。時間帯による客入りや顔触れも神父は把握済みらしい。

「良いですか。まず彼女と浮気相手に、墮胎の意志はありません」

「旦那と別れる絶好のチャンスってわけだな」

「そこまで首を突っ込まなくて宜しい」

ぴしゃりと撥ね付けられ、思わず押し黙る。早く本題に入りたいのか、どうも声が苛ついたように感じた。

「要するに、当人に墮胎の意志が無いならば、胎児を消す方法は二つ。不慮の事故か、当人の意志を無視した第三者の介入です」

そこで一息つき、カップを傾けて喉を潤す。そこから先は、ゆつくりと、出来の悪い教え子に噛んで含めるように続けた。どうやら本題のようだ。

「貴方は、後者の方法で、前者を装って始末しなくてはなりません。幸い、彼女には初めての事で、妊娠期間もまだ一カ月以内と日が浅い。“不幸”におさめることは、十分可能です」

神父の目が、少なからず輝いていた。見た目はかなり落ち着いていて聖職者に似付かわしい穏やかな態度だったが、その碧の瞳孔だけが昂揚をちらつかせている。案外、人目のある場所で打ち合せをするのは、自らが好んでいる為なのだろうか。

「……わかったよ……」

疑問符から変化した“釈然としないもの”を抱えたままだったが、仕事にはとりあえず支障はない。

内容はともかく、楽に済みそうな仕事ではあった。これだけ条件をつけられれば却って方法も限られる。

所詮、ドーベルマンが獲物噛み殺すのに、獲物の事情を知っている必要はほとんど無いのだ。

神父は短い返事でも満足したのか、紅茶を飲み干してゆらりと立ち上がった。

「方法が決まったら、連絡してください」

テーブルに紅茶とコーヒー代を置き去りに、聖書を胸に抱くようにして立ち去りかける。

「アンタ、」

冷めた碧の瞳に一瞬でも浮かんだ悲哀を確かめよう、アイスコーヒで冷えた腹の中をもやもやと彷徨う“釈然としないもの”が、俺をそんな気にさせた。

「赤ん坊は嫌いじゃないはずだな？しかも、生まれていないんだぜ」
まだ汚れていない、貴重な存在だ

俺の真横で、漆黒の法衣が立ち止まった。

「だからこそ、消し去りたいですね」

罪に汚れる前に

あの悲哀は、結局何に向けられたものだったのか

「今日は、夕日が観られそうにありませんねえ」

目の前で、聖母と救世主の真下で、神父は西と思しき方角を向く。

夕暮れ時の教会は、正直、美しいものだ。ぐるりと見下ろすステンドグラスが強烈な西日を透過させ、礼拝堂をオレンジ掛かった光で埋め尽くす。

(あいつが見たら、喜ぶだろうな)

神父もどうやら、その光景が好きらしかった。

だが今日は生憎の曇り空。教会が輝くのには十分な西日は得られそうにない。

それを知っている神父は、ひどく残念そうに、位置的に西日をまともにも受けるガブリエルを見つめるのだ。

(…変なトコで、無邪気な神父サマだ)

まだまだ雇い主の性格を見極められないまま、俺は祈るでも恨むでもなく長椅子から立ち上がり、礼拝堂を後にする。これ以上訴えることも聞くこともない。

ドーベルマンには、獲物の事情も、その後の影響も、知る必要も権利もない。噛み殺す獲物はドーベルマンの獲物であってそうでないからだ。

明日にはまた、新しい獲物の話を引っ提げて、神父がおんぼろベルを鳴らすだけだ。

教会の重い扉を、ゆっくりと開いていく。

神父は、まだ、放たれぬ西日を願っているようだった。

c a s e A : : E N D

小休止… Cow Girl

不幸の次に幸運が起こると、とても得をした気分になる。けれどその順序が逆になると、やはりまったく正反対の気分になる。起こっている出来事は同じなのに、何やら不公平だ。

私は今、とても損な気分である。

隣町へ伸びる道路添いに構えられた、一軒の小さなパブ。周りにはほぼ荒野と言っていいくらい何も無い。そういう場所だからこそ、車での旅行者や運送屋などに重宝されている店だ。

かく言う私も、現在進行形で重宝しているところである。受話器を握り締めて、ただただ幸運を待つ。こういう事は制限をつけなければ切りが無いので、あらかじめ潔く10コールまでと決めておいた。

3コール… 4コール…

(頼む…頼むよ…)

5コール… 6… 7…

8コール目を聞き終わる前に、私の勘がダメだと叫ぶ。思わず受話器を置いてしまった。

不幸なことに限って続くものらしい。

「あああっもうっ、馬鹿！」

腹立ち紛れに帽子を後ろへ弾き飛ばし、髪をぐしゃぐしゃに掻きまわす。喉のところで帽子の紐が引つ掛かって少し苦しいが、それどころではない。

「ダメだ…」

咳きながら電話に背を向けると、パブの主人がこちらを向いて心配そうに首を傾げた。

「……………急用かね？」

五十代半ばと思しき店主は、少ない口数と、皺がいかつい陰影を刻んでいる風貌からは想像できないくらい、細やかな気遣いに長けていた。それほど付き合いが長くなくても判る。人を見る目には自信があった。

「ちょっと友達の助けが欲しかったんだけど…」

こういう人には……卑怯なようでも……困っている事を正直に訴えるのが良い。今は背に腹は変えられないのだ。

「ツイてないよねえ、こういう時に限って頼りにならないんだ」

身長差のある店主を見上げて弱々しく苦笑した後、肩を落として俯く。これからどうしようと思案する調子で顔は斜め下を向き、瞼を軽く伏せて……“手助けが必要な可憐な女”を演じる。

「……………トモダチは何処に居るんだ」

食い付いた。慎重に糸を手繰り寄せるため、他意のない風に町の名

前を告げる。

「ま、どっちにしてもそこには行かなくちゃ…あー、乗せてってくれそうなお客さん、いなくなっちゃったなあ」

わざとらしいかもしれないが、独り言を装って嘆いてみる。事実、今は私と店主しかパブには居ない。重宝される店とは言っても、旅行者の入りというのは不安定だ。町の店のように…町中にあっても絶望的に人気の無い店なら別だが…常に客が居るような状況にはならない。

逆に言えば…こういう店の場合、店員が…店主も含めて…ひとり欠けても大きな問題にはならないわけで…

「……おい」

店主の太い声が、ひよろりと痩せた青年の店員を呼ぶ。ここには彼ら二人と、客が少なくなると店の奥へそそくさと引っ込むヘビースモーカーの女…どうやら店主の親類らしい…の三人しか従業員は居ない。

痩せっぼっちの青年は背筋を正して、店主の言い付けを聞く。

「俺が戻ってくるまで、頼んだぞ」

脅しているように聞こえてしまうのは低く迫力のある声と風貌のせいなのだが、青年は半ば悲鳴を上げるようにして了承を示した。新入りのようだ。

店主は再び私に向き直り、店の出入口へ顎をしゃくった。

「ごめんね、わざわざお店離れてもらって…」

申し訳なさそうに肩を竦める。思惑が叶って安堵しているのも事実だが、申し訳ないとも本当に思っている。

店主は窓から片腕を出し、慣れた風に片手でハンドルを握りながら小さく首を振っただけだ。それで十分、安堵が重なる。

使いこなされたトラックに揺られながら、私達は真直ぐに伸びた道路を走っている。運転席と助手席、どちらの窓から見ても、見えるのは輝くばかりの晴天と、その下に広がる茶色く埃っぽい荒地だけ。けれど、私は決して、この風景が嫌いではない。揺れるものの、大型トラックの座席も広々として - - 大柄な店主には少々窮屈そうだが - - 快適だ。

気分が良い。

「ね、ラジオつけてもいい？」

図々しいのを調子で頼んでみれば、黙りこくつたままあっさりと首を縦に振る。

遠慮なく電源を入れ、ザアザアと土砂降りのような音を垂れ流す周波数を合わせれば、間もなく少し古びたロックが流れだす。

最高だ。

「私、この曲好き」

「…知ってるのかい」

「初めて聞いたけど、一目惚れ…じゃなくて、一耳惚れかな」

そうか、と唸るような返事が帰ってくる。いかにも不機嫌そうな唸りに続くのは、

「……………俺も好きだ」

たっぷりと間を置いた告白。

私は、この不器用で優しい店主が大好きになった。進行方向を向いたままのしかめつらしい横顔に、飛び付いてキスしたいくらいだ。

(どうしてもどうにかならない時は、あのパブで働こうかな)

まっさらに澄んだ青空を見上げながら、長年の夢と一目惚れを天秤にかけてみる。

窓を開けて風を感じたかったが、砂ぼこりも飛んでくるのでやめておく。

コバルトブルーの空、荒涼とした大地、真直ぐ伸びていく道
快適な馬のしものに乗り、隣に頼れる相棒を連れ、ご機嫌な音楽をBGMに。

幼い頃、スクリーンに見た憧れのカウボーイを思い出しながら、最高に得した気分で帽子を被り直した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7467d/>

P R I E S T

2010年10月9日06時12分発行